

[逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え] 新連載

text：渋澤 健



逆境の時こそ、力を尽くす

第①回 「やりたい」「やりたくない」を軸に考える

去

年の3月から新型コロナウイルス感染の禍が収まりを見せることなく、変異を繰り返し、私たちの生活が「ノーマル」に戻る展開がなかなか見えてきません。だからこそ、我々は自問自答していると思います。

何が変わらなければならないことなのか。そして、何が変わらないものなのか。

生活の面でも、仕事の面でも、コロナ禍という希代未聞の逆境において今までと同じことを続けることは不可能です。環境変化に応じて我々は「進化」しなければなりません。

一方、どの時代でも通じる変わらない普遍性もあります。だから渋沢栄一への関心が昨今、高まっているのでしょう。

渋沢栄一は江戸時代の封建国家に生まれ、明治維新という「グレート・リセット」で日本が近代化社会へと転進した激変の時代において91年という長い人生を全

うし、「ニューノーマル」の新しい時代の担い手となりました。

その渋沢栄一が後世に残した最大の財産は、実は「言葉」であると、玄孫である私は思っています。100年以上前の言葉ですが、今の時代でも生きています。なぜなら、栄一という言葉には常に未来志向があったからです。現状維持に満足していない激励の言葉です。もっと良い社会に、もっと良い会社に、もっと良い経営者に、もっと良い国民に、必ずなれるはずだ、と。

今回の新コラムでは、渋沢栄一が残してくれた言葉を解釈し、現在の逆境の時代に奮いをかけることに一石を投げたいと思います。

栄一は、1916年(大正5年)に刊行された講演集『論語と算盤』で「大丈夫の試金石」という逆境に立ったときの心構えを唱えています。人と人の間や、人と

社会の間で生じる人為的な逆境の場合、「自分からこうしたい、ああしたいと奮励さえすれば、大概はその意のごとくなるものである」と栄一は提唱します。

ただ、「多くの人は自ら幸福なる運命を招こうとはせず、かえって手前の方からほとんど故意にねじけた人となって逆境を招くようなことをしてしまう」と栄一は問題視します。なぜなら、多くの場合、我々は「できる」「できない」という軸で判断しているからです。

一方、渋沢栄一が勧めているのは「こうしたい、ああしたい」、つまり「やりたい」「やりたくない」という軸です。

この二つの軸の関係性でのベストポジションは「やりたい」ことが「できる」ことです。一方、「できない」ことでも「やりたくない」のであれば優先度が高くなく、場合によっては捨けても良いところかもしれません。

問題は「できる」のに「やりたくない」ところ。これには改善が必要です。

ただ、ほとんどの場合、我々は「やりたい」のに、時間がないから「できない」、お金がないから「できない」、経験がないから「できない」、制限があるから「できない」というところにいます。そのような状態で「できる」「できない」の軸で判断すると、「できない」ので、「やりたい」ことが「やりたくない」ところに沈んでしまう恐れがあります。

一方、常に「こうしたい、ああしたい」つまり、「やりたい」というベクトルを立てておけば、いずれ、「できない」ことが「できる」ことへと展開する可能性の扉が開きます。

「青天を衝け」るために、上を向いて歩こう。これが栄一の現代へのメッセージです。